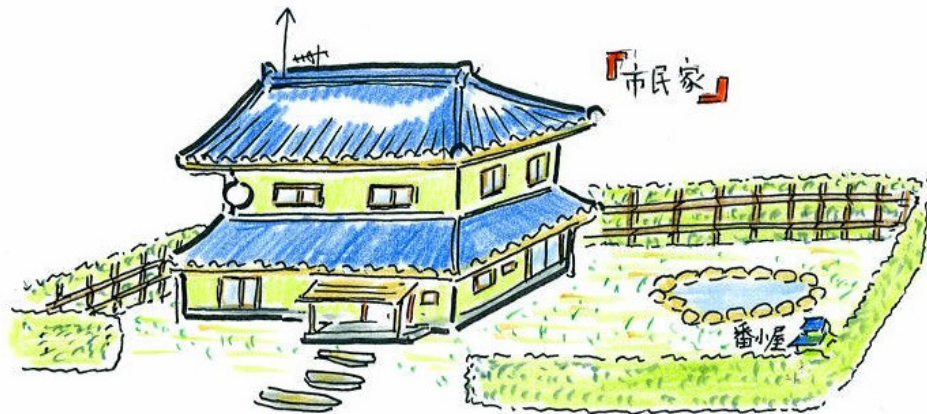


# ◆◆ 支援くんの火災予防奮闘記 ◆◆ これまでのあらすじ

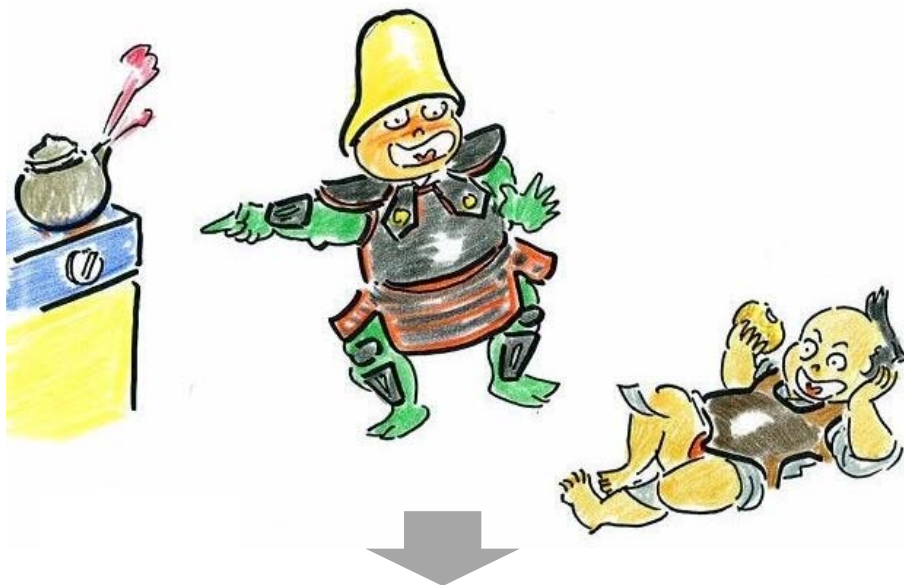
物語を読む前にまずご覧ください。



物語の主人公 支援くんは「市民家」の火災予防を司る妖精です。



仕事は家来の中間 ご助と共に、「市民家」の火災予防の点検を行うことですが、まじめな支援くんに比べ、あまり仕事熱心ではないご助の点検はいつも問題ばかりで、時に大きな事故まで起こしてしまいます。





そんなご助に手を焼きながら、点検を行う支援くんたちの姿は、普通の人には見えない筈なのですが、今年5歳になる市民家の長女<sup>えん</sup>援ちゃんには何故か二人の姿が見えるようになったのでした。

<sup>てんとく</sup>点得幼稚園の年中さんの援ちゃんは、二人と遊ぶのがだぁーい好き！



援ちゃんの好奇心が大きな事件を引き起こすこともあります。

ご助と援ちゃんに振り回され、苦勞の絶えない支援くんの『火災予防奮闘記』

をどうぞご覧ください。

### 主な登場人物



援ちゃん 5歳



支援くん



ご助 (中間)



ミーちゃん (飼い猫)



ママ



パパ



閻魔様

# 支援くんの火災予防奮闘記

～火災を起こさないために～

Vol.18

「駄目だったら駄目っ」と朝から奥方様のきつい声がお屋敷に響き、姫様の

「いやーっ、欲しいのっ。欲しいっ。わーんママーっ。」の声が続いたのじゃ。



「何事かの？」と点検のためお屋敷に入ったばかりの拙者のご助と顔を見合わ

せながら聞いておったのじゃ。

「えんにはおひな様があるでしょ。あれは男の子のお飾りなの。」と言われる

奥方様に



「今日から男の子になる！だから買って、ねえ欲しいいいいの！」と聞かぬ姫様。



「あれじゃな。」と拙者が言うと

「あれですな。」とご助。

「あれは立派じゃからなあ大空に。」

「そおですなああれで今一度雀のお宿に。」

「青いのと赤いのと他にも白や黄色や緑があって。」

「そうですじゃ、青や緑がとても綺麗で良い匂いなんでさ。」

「そうそういい匂い・・・？あれは匂わんぞ。」

「お戯れを。あんないい匂いはなかったですぜ。」

「??? ご助、そちはあれを何じゃと思うておる？」

「あれは・・・極彩色のあのお方にお逢いするための・・・あれでしょ。」

「何をゆうておる拙者のあれは鯉のぼりのことじゃ。そちのあれはなんじゃ？」

「鯉・・・のぼり?・・・ああ、そうです。あっしのあれも鯉のぼりのことでき。」



「・・・嘘じゃな。ソチが嘘を申すときはちょんまげが立つのじゃ。おのれは  
またぞろ孔雀様のことを考えておったのじゃろ！（Vol. 4 参照）」

「へへっ、あっしのあれは凧でき。5月5日のこどもの日には健康と立身出世を  
願っての凧揚げが定番でしょ。」

「なるほど一理あるの。じゃが姫様のあれは鯉のぼりじゃな。見よ。」と拙者が指さす先で姫様がシーツを体に巻いてもぞもぞとしながら、  
「ママー。これが欲しいのお。」とわめいておった。



「あれま・・・本当じゃ。」と姫様を見やるご助に  
「ご助、じろじろ見るでない、気づかれるぞ。触らぬ神に祟りなしじゃ。さっさと済ませて次に行くぞ。」という拙者の肩越しに  
「ちえん、触らぬきやみにたたりなしとはにゃんぢゃ？」と姫様が聞いて来られたのじゃ。

「ひいっ、い、いつの間に？」と驚く拙者に

「のうのうちえん、触らぬきやみにたたりなしとはにゃんにゃの？」と重ねて

聞くので

「そ、それは・・・トイレに入ったあと・・・紙が・・・無いと大変という意

味かと。」と言う傍らから

「旦那様は姫様に見つかったら厄介じゃから早く逃げようと言ったんでさ。」

とご助。





「ば、馬鹿者っ。おのれは何を言うのじゃ。」と言いながら姫様を見やると

目に大粒の涙をたたえた姫様の姿が。

「い、いや姫様。も、もし姫様があれが欲しいとおっしゃるなら拙者のご助が

お作りいたしましょうぞ。」と申し上げると

「本当きゃ？たによむぢよ。援ちゃんは眠くなっちゃったから昼寝しゆる。ふ

あああああ・・・。」と大あくびをすると涙をたもとで拭きながら子供部屋へ

と入っていったのじゃ。

「あんな約束してどうするんです？あっしは嫌ですからね。」と部屋を出て行

こうとすご助に

「ま、待て！おのれが姫様にあんなことを言うからじゃろが！と、とにかく鯉

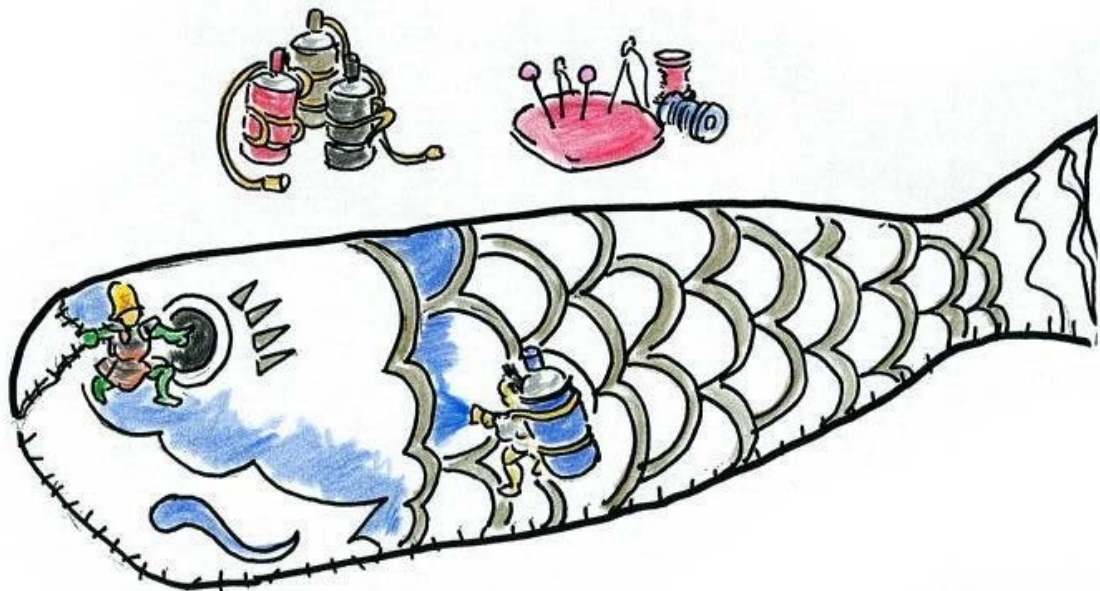
のぼり作りを手伝え。」と嫌がるご助に命じて番小屋にシーツと何色かのカラ

ースプレーを用意させたのじゃ。

「ご、ご助、こっちは鯉の口じゃと言ったじゃろ、縫うたらいかん。それ、こ

こに青のスプレーじゃ。」

「ちっ、人使いが荒いんだから。あらよっ。シューとひと吹き。ううん、良い匂いじゃ。」



「あ、あまり吸い込むんじゃないぞ。揮発性の有機溶剤は体に毒じゃからな。」

「へへへ・・・旦那様・・・なんかポーとしてきやしたぜ。」

「ふふふ、おのれもか。拙者もじゃ。ま、窓が閉まっておるではないか・・・！

換気せねば。」

「だ、旦那様・・・。あっし、タバコを吸って良いですかい？」とご助が懐からタバコとライターを取り出したのじゃ。

「えへへへ・・・。ご助、駄目じゃ爆発するじゃろうが。」と注意したのじゃ。

「あははは・・・そうですね。爆発いたしますな。これは止めておきましょう。」

とご助。



「そうじゃ。危ないからの。ご助、目に金と黒をスプレーしたら緋鯉に移るぞ。」

「へい。シュウーと・・・。ありゃはみ出した。」

「構わん構わん・・・。それ拙者もシュウーと。」

「へへ旦那様。人に吹き付けちゃいけませんぜ、きやっきや、きやっきや。」



「そりゃ。」

「おのれ。」

時間が立ち、昼寝から起きた姫様が番小屋を覗くと、支援とご助はまだスプレー掛けごっこを続けておった。

「ちえん、ぼすけ、できたによ？」と姫様に訊かれ、少し正気に戻った拙者は

「ああ、姫様ですか……。何とか……。ご助、ご助。姫様に鯉のぼりを。」

と命じたのじゃ。



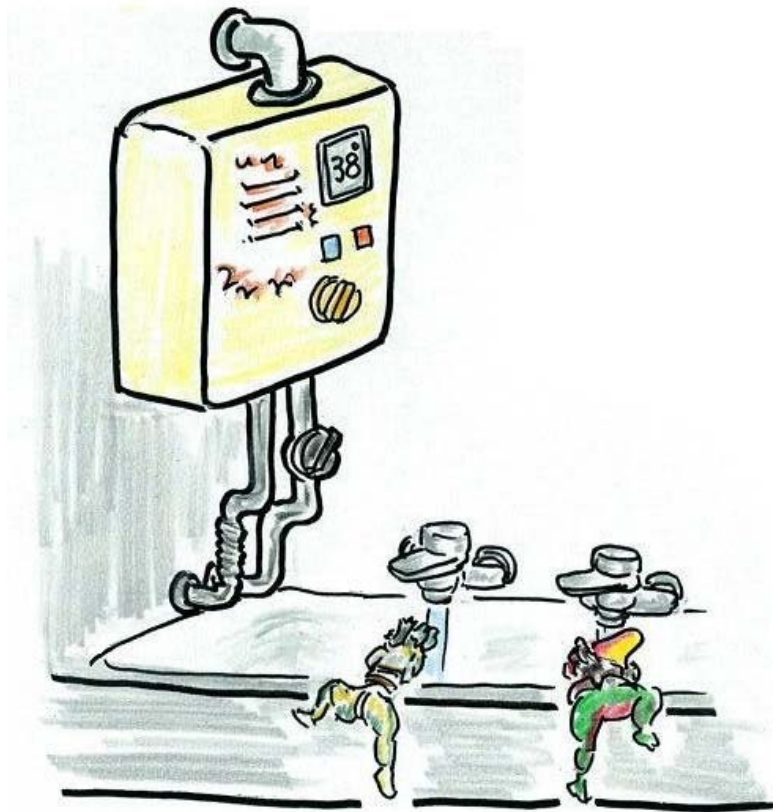


「へえい。ですが旦那様、あっしの手はスプレーで汚れてまして・・・。」と  
いうご助に

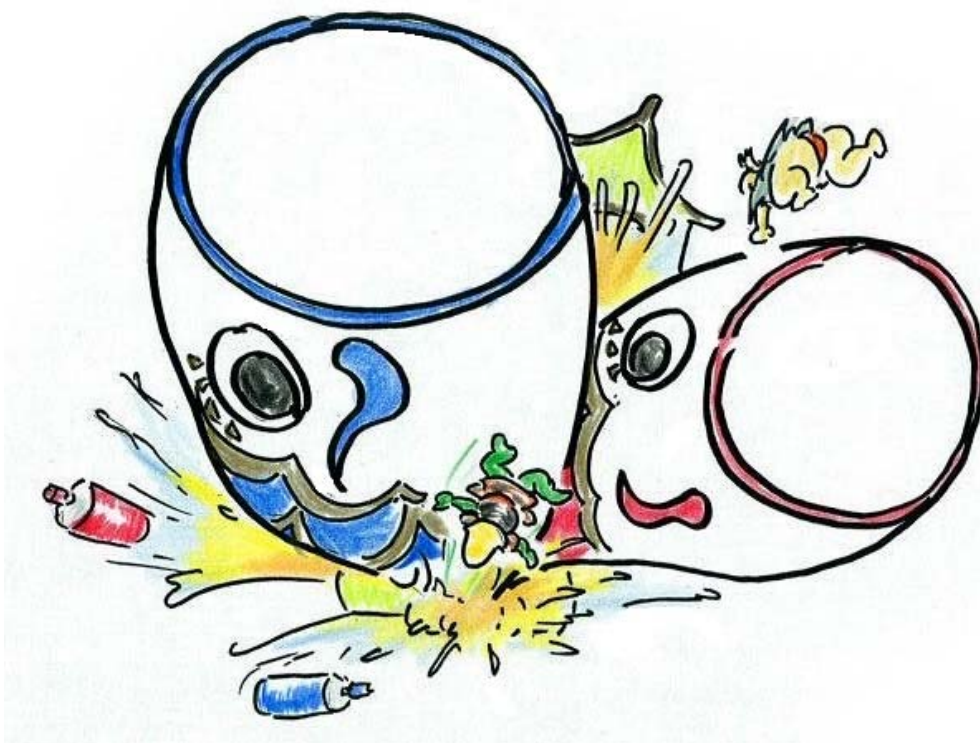
「おっ、拙者の手もこんなに汚れて。このまま鯉のぼりを持つと汚れてしまう  
な。」

「へい旦那様・・・。一旦スプレー掛けは中断して手を洗いましょうや。」と  
の提案に

「そうじゃな。手を洗おう、手を洗おう。」と拙者たちは洗面台に並んでお湯  
の栓を回したのじゃ



そしたら・・・。カチカチカチと給湯器の発火装置が作動すると同時に  
どどーーーーんと番小屋の中で爆発が起きたのじゃ。



番小屋から庭まで飛ばされた拙者等を尻目に、拙者たちが作った真鯉と緋鯉は爆風に乗り、お屋敷の中庭を優雅に泳いで行った。

その鯉のぼりを指さしながら

「ひ、姫様、御覧なされ……。姫様御所望の鯉のぼりでござる。」と真っ黒に焦げた拙者が姫様に申し上げると

「鯉のぼり？援ちゃん鯉のぼりにゃんていらにゃいの。」

「……。へ？じゃあ……。」と言いよどむ拙者に

「だ、だから言ったじゃないですか、凧でしょ姫様。」と勢いづいたご助が。

「ううん、援ちゃんが欲しいのは、」と姫様がいうとお屋敷の方から

「えん。ほら買って来たわよ、柏餅。いい？一個だけよ。」と奥方様の声が

「わーい、ママ大しゅき。」と駆けだしていったのですじゃ。



「旦那様・・・あのタイミングで給湯器はないでしょ。」というご助に

「じゃから言ったじゃろ、触らぬ神にと・・・のうご助よ」と拙者とご助は真っ

黒なお互いの顔をいつまでも見ておったのじゃ。